

リング・フランカの現実

— 2017年度経営学部SA (Study Abroad) 帯同経験を通じての考察 —

石 積 勝

目次 はじめに
序

- 1 今回のSAプログラムの特徴
 - 1-1 筆者のSAプログラムの過去の帯同
 - 1-2 今回のプログラムの特殊性
 - 1-3 学生の当惑と葛藤

- 2 リング・フランカとしての英語という難問
 - 2-1 ウイーン大学ドイツ語サマースクール研修の現実
 - 2-2 神奈川大学経営学部における英語を使った授業の現実

- 3 英語帝国主義という問題とグローバリゼーションの現実
 - 3-1 英語という難問
 - 3-2 英語と現実
 - 3-3 英語帝国主義——英語をネイティブ・スピーカーから解放せよ (とりあえずの結論)

はじめに

本号の共通テーマは「理念と実践」である。できるだけ自由に、かつ幅広く多くの方々から論文等を寄稿してほしいとの意図の下、「理論的な論文」はもとより、いわゆる「教育活動の報告書」的なものも想定し、そのどちらをも歓迎できる共通テーマを設定した。そこで私自身は政治学のグランド・セオリーにかかわる、かなり理論的な論文を当初は構想していたのだが、その論文は別の機会に試みることにし、急遽テーマを変えて本稿を投稿することにした。本稿の内容は「実践報告」を下敷きにした「考察」（理論とまではいかないが）ということになる。その意味では研究論文というよりは、いわばエッセイであるが、期せずして「理念と実践」という今号の共通テーマにそのまま合致するものとなった。本ノートは2017年度SAウイーン大学研修についての報告であり、参加学生と筆者のそれぞれの日誌をもとに、それらを材料にしながら、そこから見えてきたいくつかの問題に関する筆者自身の考察である。

序

筆者は2017年夏、約1カ月間にわたり経営学部国際経営学科が主催するSA (Study Abroad) プログラム、ウイーン派遣プログラムに帯同した。筆者の滞在はもっぱら学生サポートという役割を担ったものであったが、その過程を通じ、学生ともども、日本の国際教育、さらには日本の国際化そのものについて様々に考察することになった。基本的に今回のSAウイーン・プログラムが、きわめて特殊な状況の中で行われたことに起因する問題とその考察ではあったのだが、しかし、そこから見えてきたのは今回だけの特殊な問題というわけでもなく、ある種の普遍性をもったものであるのではないかと考え、報告に加え、いわゆる「考察」を含む研究ノートとして掲載させてもらうことにした。本稿ではまず第1部として「今回のSAプログラムの特徴」について述べ、第2部では、そのプログラムの中で学生自身が厳しく直面することになった「リング・フランカとしての英語」の問題について考えることにする。第3部では「英語

帝国主義という問題とグローバリゼーションの現実」というなにやら物々しいタイトルを付けたが、ここでは筆者の問題意識についてその一端をしめすにとどめた。今後機会があれば本格的に論じたいものだ。

本稿は具体的な1人の学生の1カ月間にわたる異文化との、そして特に英語との格闘であり、その体験を通じての考察であるので、最後に付録として筆者の手になる日々の日誌の何日か分を掲載することにする。また学生は学生で日誌を毎日付けており、同時に約5千字の報告書を書いている。許可を得て、そうした学生の生の声も本稿の中で織り交ぜて紹介したい。

1 今回のSAプログラムの特徴

1-1 筆者のSAプログラムの過去の帯同

国際教育に力を入れている経営学部では毎年SAプログラムを実施している。2017年の夏にはカナダ、イギリス、オーストラリア、中国、スペイン、フランスそしてオーストリアの各大学での約1カ月間にわたる研修を行った。筆者は過去数回カナダのビクトリア大学に引率者として参加している。ビクトリア大学のプログラムには数多くの日本の大学が参加していて、研修も基本的に日本人を対象とするプログラムである。経営学部からは毎回10名前後の学生が参加するが、現地では複数（7-8）の日本の大学からの学生が英語の能力別にクラス編成され学ぶことになる。1カ月にわたりホームステイを行うので、当然ながらステイ先で生活面、英語面で苦勞する学生も出てくるが、日本語の世界から完全に隔絶されるわけではない。また長年にわたり日本人学生をかなりの人数受け入れていることもあり、プログラムは実に良く整備されている。事務局員もきめ細かく学生の相談にのったり、様々なイベントを提供したりしている。また大学院生が、各小グループのTA（ティーチング・アシスタント）になり、一緒に昼食をとり午後の様々なアクティビティの世話役も担っている。いわば「至れり尽くせり」のプログラムであるが、逆にそうであるからこそ、例えば今回筆者が帯同したウイーン大学のプログラムなどに比較するとプログ

ラム・コストとしては若干割高になっている。

1-2 今回のプログラムの特殊性

筆者にとって初めてのオーストリア研修の帯同はビクトリア大学への帯同とは大きく異なるものであった。今回は参加者の直前のキャンセルもあり、結局1名になってしまった。これはこれまでにない特殊な状況であり、参加学生は1人でウイーン大学のプログラムに参加することになった。クラスでも寮でもほぼ日本人と接触することなく、いわば完全アウェイの環境の中で1カ月間を過ごすことになったのである。このウイーン・プログラムでは通常5-10名程度の参加者がおり、学生たちは必要に応じて日本人同士行動を共にし、お互いに補い合って生活することになり、完全アウェイの状況にはおられない。想像に難くないと思うが、今回の1人参加という状況から生まれたこの夏のウイーン・プログラムの特殊性は一方では学生に大きな試練を与えることになったが、同時にそうであるからこそ、通常得られない貴重な体験を提供することにもなったといえる。まずその中で学生の当惑と葛藤に関して述べたい。

1-3 学生の当惑と葛藤

学生は帰国後の感想文で以下のように述べている。「今回の体験は、私が生きてきた20年の中で、衝撃的であり、辛い修行のようであった。今、思い出して実感しているのは、苦しく、辛いなかでも多くの出会いや発見、そしてたくさんの体験である」（「報告書」より）。この当惑と葛藤は事前には全く想定できなかったといえる。この学生の当惑と葛藤はプログラム開始直後から始まる。以下、報告書から抜粋し、学生の率直な思いを当該学生の了解のうえでさらに紹介する。

「二日目、参加するクラスを決めるために、プレースメントテストを受けにウイーン大学に向かった。・・・中略・・・受けたプレースメントテストは面接と筆記試験であった。ドイツ語は大学で1年間しっかり学んでい

たので多少自信はあった。しかし面接では面接官の言っているドイツ語の意味がほとんど理解できなかった。筆記試験は意外とできたと自信を持って提出したが、結果は30点満点中5点という結果だった。」

「3日目、朝9時から全体ミーティングがあり、その後、各クラスに分かれて授業が開始された。全体ミーティングではドイツ語で話が進みスライドは英語で表示されているため全く理解できなかった。他の学生たちは拍手喝さいで笑い声が飛び交う中、私は理解しようとすることに必死だった。・・・授業の後、クラスの仲間たちと近くのレストランで食事をした。そこにいたクラスメート全員が英語を堪能に使って会話していた。その光景を目にし、話の内容が理解できず、会話に加わることもできない自分が今まで感じたことのない孤独と劣等感に押しつぶされそうになった。」

「次の日から通常通りの授業となった。ドイツ語の授業は知っている文法がいくつかあり、最初のほうはそれほど苦勞することはなかった。ところが説明はすべて英語だった。英語ができずクラスメートの中には助けてもらえそうな日本人もいなかった。質問の仕方も分からず、ひたすら携帯の翻訳アプリに頼っていた。この頃さらに強い孤独感と劣等感を感じ、寮に居ること、学校に行くことが苦痛になっていた。＜なにをしにオーストリアまで来たのか＞＜日本に戻りたい＞という思いが自分の気持ちの中でループしていた。私は普段あまり悩むという経験はなく＜なんとなくかなるだろう＞というタイプだと思っていた。それだけにこの気持ちのダメージがあまりにも大きく、最初の1週間は毎日のように先が見えない孤独、英語やドイツ語を話せない劣等感と闘っていた。」(以上SAウイーン参加 学生報告書「英語に対する自分の意識の変化について——ウイーンでのSAプログラム参加体験から——」2017年9月より抜粋)

このような状況の中で悪戦苦闘しながらも、学生はいくつかのきっかけで事態を打開することに成功する。きっかけのひとつは筆者との対話であった。対話の中で自分自身の状況を徐々にではあるが冷静に客観的に余裕を持って考えることになったようだ。もともと感性の鋭い、海外旅行の経験もすでに3回もあり、「積極的」「前向き」「自律的」なタイプの学生である。「このような場に置

かれたら誰でも落ち込み、劣等感にさいなまれるが、これは決して自分のせいではない」「日本という孤島状態の社会の中で生きてきたのだから当然である」「国際人とは何か」「英語はどのような位置を占めているか」「日本の教育の特徴」などなど、ありとあらゆることを、それこそ数回分の「日本研究」の講義科目で語るようなことを連日語り合った。それが事態打開への大きなきっかけになっただろう。さらにもっと重要なことは、とにかく行動してみようと学生が思い立ったことであろう。英語によるいわゆる<会話>にこだわらず、誘われたパーティーその他の行事とにかく思いきって参加すること、それをとにかく<I Try>（学生の言葉）の精神で実践する。そう思い立ったようだ。学生自身が元大リーガー川崎宗則の「逆境を笑え、苦笑いで」という言葉を思い出し、その言葉を支えにして逆境を乗り切ろうとしたとも報告書に記している。川崎選手の事は前から注目していたようで、報告書の中でも「自分のSAプログラムと川崎選手のアメリカでの生活と類似するものがある」とのべ、「とりあえず前に出るという川崎選手の前向きな精神力」や「やらないで後悔するよりやって後悔した方が良い」といった言葉にも報告書の中で触れている。

「人生最大の自信喪失」「とんでもないカルチャーショック」「自分の存在が完全否定されている感じ」「何のためにここにいるのかさっぱりわからない」「コミュニケーション力には絶対の自信があったのでショック」という言葉が現地では筆者の前で何回も発せられたが、英語の問題を越えて、自ら挑戦すること、壁にぶつかりながらもそれを乗り越えたとき何かをつかむことができるという確信を得たようである。結果的にはこの学生にとっては人生の中でかけがえのない体験になったようである。それにしても連日にわたる学生との対話は筆者にとっても、リング・フランカとしての英語の問題、さらには日本の国際化の問題を改めて切迫感と現実感を持って考える機会になった。以下そうした問題についてさらに論じてみたい。

2 リンガ・フランカとしての英語という難問

2-1 ウィーン大学ドイツ語サマースクール研修の現実

前述のように、ウィーン大学サマープログラムでは、習熟度別に約4週間にわたりドイツ語学習の授業が提供されている。このプログラムの参加者は原則的に大学の学生寮に住み、そこからキャンパスに通う。キャンパスも寮もウィーン市街の中心地に位置し、ウィーンの豊かな文化にも日常的に接することができ、まさしく言語と文化を学ぶ絶好のプログラムである。しかもプログラム・コストも若干低く抑えられている。総合的に言えば短期留学先としてお勧めであることは間違いない。実は短期の語学研修以外でも中長期の留学先として、ウィーンあるいはいくつかの大陸ヨーロッパ諸国の高等教育機関の授業料は英米各国に比較して相対的に低い。大陸欧州の多くの国々では高等教育における公的負担の原則がかなりの程度生き残り、それは留学生にもある限度内で反映されているようだ。ただし今回の学生の体験のように日本人として一人で参加するような場合には、やはりドイツ語か英語かどちらでもよいが、それなりに使えることが重要になってくるようだ。逆にいえば、ある程度英語に自信があって、もうひとつの外国語としてドイツ語を学びたいと思っている学生には絶好の留学先になるだろう。寮生活も含め、授業以外では基本的に英語が学生間の共通言語であるという状況の中で、英独両語を鍛えるという意味ではまさしく一石二鳥である。学生が割り振られたクラスの国別構成は——日本人1、ロシア人1、スペイン人2、アメリカ人1、中国人1、コロンビア人1、イギリス人1、フランス人1、チェコ人1、アイスランド人1、イラン人2、サウジアラビア人2——だった。ここでは英語がリンガ・フランカとして機能する。ところでこのプログラムの最終日8月25日には修了式が行われ、筆者もその場に列席し、式が終了したのち、サマープログラム責任者との面談も行ったので、その日（8月25日）の日誌を以下に記す。

筆者日誌8月25日分

午前10時過ぎからドイツ語サマースクール全体の修了式に出席。

簡素ながらなかなかいい雰囲気での修了式。司会進行はサマースクール全体の責任者であるMs Kramlが自ら行う。司会者自ら英語を交えてスピーチ。今回の参加者数を国別にランキング発表して（そのたびに大拍手）盛り上げる。同時に学生が作ったと思われるPVで盛り上げる。Tシャツなどの販売もプロモーション。権威あるウイーン大学の中でこのプログラムはじつにカジュアルで好印象。参加者ランキング上位10か国：

① 日本:50 (明治約20、京都女子約10を含む) ②スペイン:48 ③トルコ:48 ④ロシア:46 ⑤イタリア:39 ⑥ポーランド:33 ⑦ウクライナ:33 ⑧イラン:31 ⑨イスラエル:27 ⑩ハンガリー:24、この後中国、韓国なども続く。また北中南米、イギリスや他のヨーロッパ諸国から万遍なく参加していることがわかる。全体で約300名ほどか。

責任者のMs Kramlと約15分話をする。要点は

- ① 日本は重要なマーケット。
- ② このプログラムは基本的に独立採算で運営。拡大の計画。
- ③ 大学本体の授業料——オーストリア人の授業料は非常に安い。外国人留学生も米英の大学とは比較にならないほど低額。
- ④ 大学本体でもエラスムス・プログラムや国際化に対応して英語での（社会科学系）通常科目授業提供が急増中。（象牙の塔から脱却が急激に進んでいる）
- ⑤ ③④の理由で日本からの留学拡大は大いに可能性あり。メリットあり。
- ⑥ 今回は筆者もすぐに帰国するが、できたら国際交流部署のしかるべき担当者同士で情報交換をすべき。

学生はクラスの仲間と最後の食事会に参加。日本人1人ながら、すっかり打ち解けて楽しい時間を持った模様（最初の週からは劇的な変貌）。なおサマースクールとはいえ、クラスの4分の1くらいはどうやら合格しなかった模様。このあたり、いかにもヨーロッパの老舗大学らしく厳格。参加した学生さんについては筆者が担当の先生に聞いたところ「よくやった

し合格は問題ない」とのこと。実際、各クラスに分かれての合格証書授与式で無事証書をゲット。

今回のサマープログラム参加者はランキング上位10カ国以外にもそれこそ世界各国から来ていた。日本からの参加者が最大であることはある意味では驚きであり、同時に「さもありなん」という気もする。日本の大学から欧米の大学への短期留学の人気は依然として高く、同時に中長期の単位取得を伴う留学については語学面でのハードルが高いこともあり、やはりランキングのような数字になるのだろう。しかも日本からの参加はグループで、大学主催の夏季プログラムであり、他の各国からの参加はほとんどの場合どうやら個人参加ということのようにである。そこでのリンガ・フランカはもちろん英語ということになっている。また上記担当者との話の要点④でも示したとおり、英語での通常科目の提供が急速に進んでいるようである。この点はウーン大学に限らず欧州各国の大学の最近の大きな変化である。

2-2 神奈川大学経営学部における英語を使った授業の現実

さて神奈川大学経営学部ではまだまだ数は限られてはいるが、いくつかの授業ではリンガ・フランカとしての英語を使ったコンテンツクラスが提供されている。筆者も昨年度から基本的に二つの科目（International Politics / International Organization）でその試みを始めている。この二つの科目は正規科目であり春学期と秋学期の両学期で提供されている。主たる受講者はいわゆる交換留学生で、例えば2017年度秋学期のInternational Politicsにはスペイン人2名、メキシコ人2名、スイス人1名、日本人1名、マレーシア人4名が参加している。いずれもほとんど日本語の知識ゼロで来日した学生たちで、半年間の滞在の後には本来所属する大学に帰るか、またはさらに他の第3国で勉強・体験を積み重ね、最終的にはそれぞれの本来の所属大学の学位（多くの場合BA）を取得ということになる。日本語学習については日常会話を学ぶ学生もいるが、これは多くの場合単位にはならない。ここではある意味ではかなり奇妙なことが起こる。つまり日本にある日本の大学であるにも関わらず、その

クラスに参加する学生はいわば治外法権的に英語での言語空間の中で学ぶということになるのである。逆に言えばそこでの共通言語は英語であり、日本人学生は圧倒的なハンディーを背負ったストレンジャーあるいはエイリアンとしての立場に置かれる。前向きに考えれば、日本の大学に居ながら留学しているような体験ができる、ということになるのだが、そこまで割り切って自らの英語学習のために自ら進んで、ある意味では理不尽な環境の中に飛び込み、徹底的に努力しようとする日本人学生はやはりきわめて少数である。また実際問題として日本人学生の大多数にとっては、コンテンツクラスで留学生に伍して討論を含む英語での授業参加は至難である。しかし同時に、卒業して社会に出ようとする学生は英語力の有無を強く意識する。世の中に出てからの英語の重要性を繰り返し耳にしている彼らにとっては、現実（例えば彼らの英語能力）と将来の希望の間の乖離は大きい。

3 英語帝国主義という問題とグローバル化の現実

3-1 英語という難問

『英語もできないノースキルの文系はこれからどうすべきか』（PHP新書大石哲之著）という本がある。著者はその「はじめに」の中の、＜成功のルールは、時代にあわせて変わっていく＞という節で次のように述べる。

——みなさんも、うすうす感じていることだと思いますが、いまの日本では、既存のルールにいかにか効率よく乗るかということを考えているだけでは、もう人生は切り開けなのではないかと思います。そして今後は、既存のルール自体が正しいかどうか、ますますあやしくなっていきます。時代が変化し、成功のルールが変わっていくなか、自分なりの羅針盤を持っていないと、他人に人生をあずけてしまうことになる。「いままで、なんとなく生きてきていて、その結果『英語もできないノースキルの文系』になってしまった。しかし今後は、他人に人生をあずけて生きていきたくない」と考えている方。そういう方は、最後まで本書を読んでほしいと思い

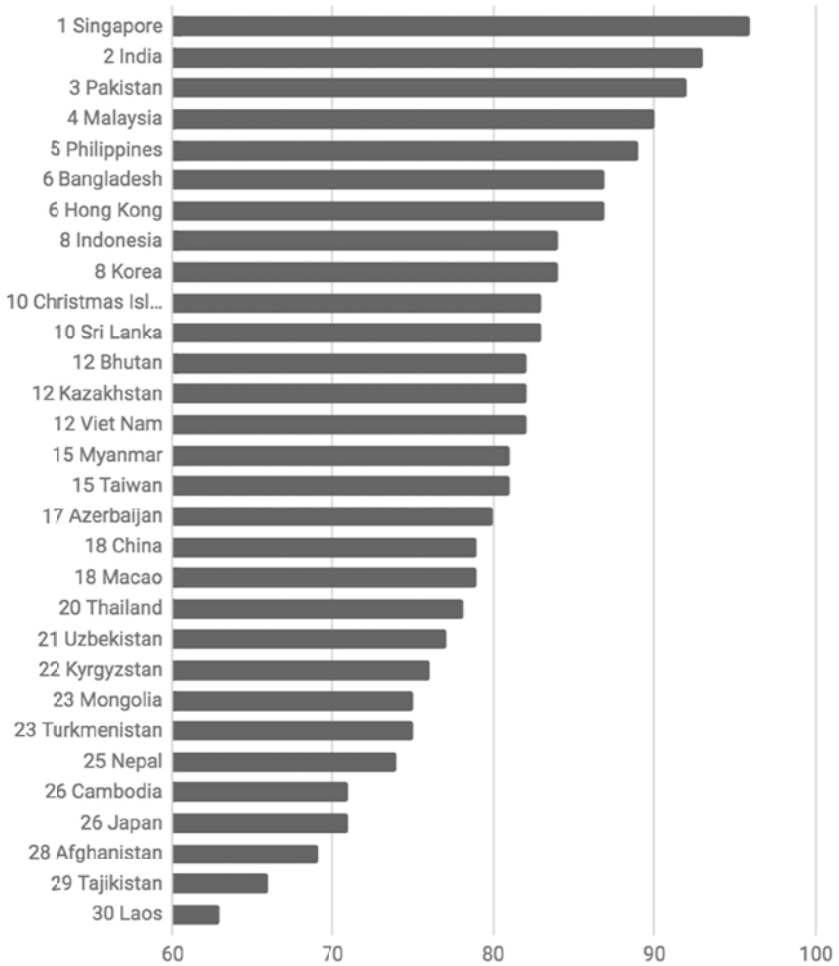
ます。—— (P5)

Kindle総合1位になったのち新書として出版されたこの本は、きわめて現実的に学生に対しての現状の説明とアドバイスを送るが、その中心になっているのがスキルとしての英語である。グローバル化はますます加速し、その中で「なくなる仕事と生きのこる仕事」を列挙し、「生きのこる仕事」に就くための英語の重要性を繰り返し述べているのである。ほかのアジア諸国の若者、特に韓国や中国の若者とたちと今後ますます熾烈な競争にさらされることが確実な中で、日本の、特に文系学生は本当に危機感を抱かないとまずいと述べているのである。このことは今回ウイーン・プログラムに参加した学生にとっては身にしみて感じられたことであろう。

3-2 英語に関するいくつかの現実

下記参考資料①は最近しばしば取り上げられているTOEFLスコアの国際比較である。TOEFLスコアの国別ランキングでは、日本は世界163か国中135位、アジアの中では30か国中26位と低い。もちろん数字はたんにTOEFLの点数比較でしかないが、この数字は象徴的に日本人の英語について語っていることもまた事実である。

参考資料①：アジア各国のTOEFL点数比較



参考：ETS TOEFL Score Data 2016

いずれにせよ英語の必要性と日本人の英語力の現実の乖離については様々な場面でそれが指摘されているが、そうした流れの中で大学入試の改革が急ピッチで進んでいる。つまり4技能測定型の入試改革である。それは当然ながらそれ

以前の教育の中身を激変させることになる。もちろんこの教育現場での激変は単に抽象的・理念的なレベルでの対応というということではない。むしろこのことはじつは実業界のニーズが大きく変わってきていることと関係している。濃淡があるにせよ日本企業においてさえ、社内英語化の動きが大企業を中心にこのところ議論されるようになった。参考資料②は英語を何らかの形で社内公用語にしている、あるいは検討している日本の会社のリストである。もちろんその実態は様々であろうし、本当に社内英語共通語化が必要なのか、あるいは必然なのかという議論は大いにある。しかしここ10年のそうした動きは企業活動のグローバリゼーションを反映し大きな話題となってきた。

参考資料②：日本企業の社内英語化

楽天株式会社 Rakuten, Inc.

株式会社 ファーストリテイリング FAST RETAILING CO., LTD.

アサヒビール株式会社 ASAHI BREWERIES, LTD.

シャープ株式会社 Sharp Corporation.

三井不動産株式会社 Mitsui Fudosan Co., Ltd.

株式会社 三井住友銀行 Sumitomo Mitsui Banking Corporation

三菱地所株式会社 MITSUBISHI ESTATE CO., LTD.

三菱商事株式会社 Mitsubishi Corporation

株式会社 日立製作所 Hitachi, Ltd.

日本電産株式会社 NIDEC CORPORATION

ソフトバンクグループ株式会社 SoftBank Group Corp.

株式会社サイバーエージェント CyberAgent, Inc.

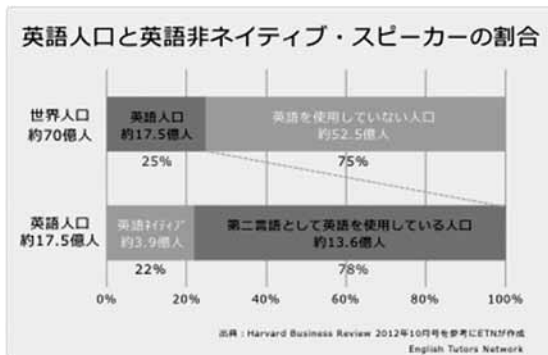
日産自動車株式会社 NISSAN MOTOR CO.,LTD.

<http://lifecy.com/>より

この英語とグローバリゼーションの関係をもう少しマクロな観点からも見ておこう。このテーマはそれこそ実証的にもまた理念的にも様々な角度からの考察が可能なテーマだが、ここでは2-3の興味あるデータを提示しておこう。

まずHarvard Business Review によれば世界人口約70億人のうち4人に1人が、実用レベルで英語を使っている「英語人口」だそうだ。さらに70億の4分の1、つまり17.5億人の英語人口のうち、ネイティブ・スピーカーは3.9億人だという。つまり残りの英語人口である13.6人は第2言語として英語を使用しているというのだ。英語を話す人のうち約78%は非ネイティブ・スピーカーということになる。こうなると標準的な英語とは何かという議論にも発展するわけだが、とにもかくにもこの数字は英語と世界の現実の一面をあらわしている。

参考資料③：Harvard Business Review 2012をもとにEnglish Tutors Network が作成



英語と現実に関するデータをさらに見ておきたい。

以下の参考資料⑤、⑥、⑦、⑧はいずれもEF (Education First) English Live という世界各国で英会話のオンラインサービスを提供する会社の報告書に掲載されているものである。英語教育をプロモートすることで利益を得ようとする企業であると考えられるので、当然データの取捨選択にはある種の意図が働いているように、それにも拘らずなかなか面白い資料であり、国連勤務や各国留学生との頻繁な接触という筆者の経験上の感覚ともかなり合致する。

このレポートではまず世界各国のEPI（英語能力指数）なるものを提示している。EPIをどのように決定しているのか、サンプリングや質問項目の立て方の正当性、客観性がどの程度担保されているのかは議論のあるところだが、そのEPIと世界銀行の提示するデータを組み合わせた興味深い資料提示である。なお、この非常に興味深いレポートについてはウィキペディア上にも批判が掲載されている。それを予め引用しておく。

EF EPIは、各国の代表抽出を行っていないことから批判されてきた。報告書では、試験の参加者は自主的に選ばれ、インターネットに接続している必要があると述べている。これは人口から抽出された統計的に有意なものというよりは、オンラインの調査である。しかし、英語能力を国ごとに比較している他の調査はほとんど存在しない。——ウィキペディア「EF EPI」の項目から引用——

いずれにせよいくつかのデータについて見てみたい。まず資料⑤⑥⑦⑧の前提となるEPIだ。以下は、2015年のデータに基づき2016年に公表された最新の各国の点数、英語能力の段階、そして順位である。ランキングは5段階に分かれる。Very High ,High, Moderate,Low, Very Low であり、日本は中国などともにLow に区分される。このランキングに関してはいろいろ議論することができよう。一応ランキングの数字に関して全般的な正当性を認めただけだが、いくつか気が付くことがある。例えば中東全体の低さである。また当然ながら植民地化の経験と英語力との関係も見えてくれる。さらに各国における社会階層と英語の使用という問題もある。それぞれ重要なテーマだがここではその点については深入りしない。

資料④：世界のEPI



Map of the results of the 2016 EF English Proficiency Index.

2016年 各国のランキング

とても高い英語能力		高い英語能力		中程度の英語能力	
順位	国	順位	国	順位	国
1	オランダ	8	オーストリア	21	スロバキア
2	デンマーク	9	ドイツ	22	インド
3	スウェーデン	10	ボーランド	23	ドミニカ共和国
4	ノルウェー	11	ベルギー	24	ブルガリア
5	フィンランド	12	マレーシア	25	スペイン
6	シンガポール	13	フィリピン	26	ボスニア・ヘルツェゴビナ
7	ルクセンブルク	14	スイス	27	韓国
		15	ポルトガル	28	イタリア
		16	チェコ	29	フランス
		17	セルビア	30	香港
		18	ハンガリー	31	ベトナム
		19	アルゼンチン	32	インドネシア
		20	ルーマニア	33	台湾

低い英語能力		とても低い英語能力	
順位	国	順位	国
34	 ロシア	49	 コロンビア
35	 日本	50	 パナマ
36	 ウクライナ	51	 トルコ
37	 マカオ	52	 チュニジア
38	 コスタリカ	53	 グアテマラ
39	 中国	54	 カザフスタン
40	 ブラジル	55	 エジプト
41	 ウクライナ	56	 タイ
42	 チリ	57	 アゼルバイジャン
43	 メキシコ	58	 スリランカ
44	 モロッコ	59	 カタール
45	 ベルー	60	 ベネズエラ
46	 アラブ首長国連邦	61	 イラン
47	 エクアドル	62	 ヨルダン
48	 パキスタン	63	 エルサルバドル
		64	 オマーン
		65	 クウェート
		66	 モンゴル
		67	 アルジェリア
		68	 サウジアラビア
		69	 カンボジア
		71	 ラオス
		71	 リビア
		72	 イラク

資料⑤

このチャートは英語能力指数と1人当たりGNI（国民総所得＝GDP＋海外からの純所得）の関係を示している。EPI(英語能力指数)が<とても高い>とされている国の国民は1人当たりの所得が47,000ドルだが<とても低い>が6,400ドルと一ケタ違う。もちろん<低い>の日本はこの中で極端な例外である。



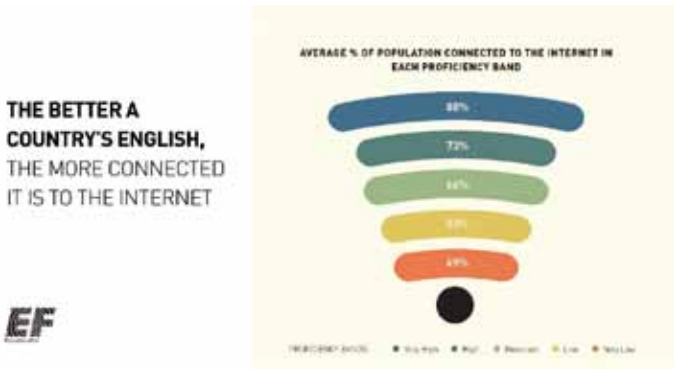
資料⑥

このグラフは英語能力指数と生活の質の関係。ここでの生活の質は国連が毎年出すHuman Development Index（人間開発指数）



資料⑦

英語能力指数とインターネット使用との関係

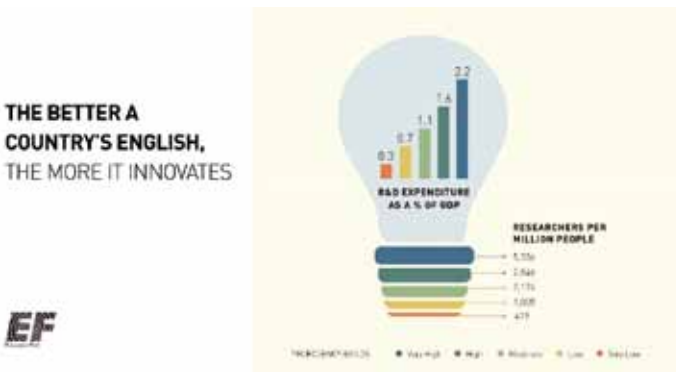


Source: United Nations Human Development Report, 2016

EF EPI Score Source: World Bank, 2015

資料⑧

英語能力指数と研究開発費および研究者数の関係



Source: United Nations Human Development Report, 2016

EF EPI Score Source: World Bank, 2015

要するに上記データは収入、生活の質（国連の定義する人間開発指数）、インターネットに対するアクセス、さらには研究開発などの重要項目において、英

語能力指数との間で相関関係があることを示しているというわけである。こうしたデータの正当性をいったんは認めるとするならば、やはり世界のグローバル化とその中で「英語」の占める位置は切っても切れないものであることが改めて確認される。またその中における日本人あるいは日本の微妙な位置もまた見て取れるのである。であるからこそ日本における根強い英語学習ブームがあり、また本稿で示される学生のいわば英語ショックの問題があるのである。これが回避できない英語の現実の姿である。しかしそれは「である」現実かもしれないが「であるべき」当為の問題はもちろん別に存在する。次節ではその当為の視点を含み持つ英語帝国主義の議論にごくごく短く触れておこう。

3-3 英語帝国主義——英語をネイティブ・スピーカーから解放せよ（とりあえずの結論）

ここ数年すっかり下火になった感があるが、数年前まで、いわゆる「英語帝国主義」あるいは「英語文化帝国主義」論争がこの国では盛んであった。津田幸男（言語学者）氏その他が先頭に立って反「英語帝国主義」の論陣を張り、日本における英語ブームに警鐘を鳴らしていた。鳥飼久美子（元同時通訳者、立教大学教授）氏なども小学校からの英語必修化に反対するという立場で論陣を張っていた。今もそうであるかもしれない。世界レベルでも反「英語文化帝国主義」の論陣はそれこそ無数の論客によって展開されてきたはずだ。そうした論陣に影響を与えた一人がエドワード・サイードのような知識人であったかもしれない。「英語という難問」は、もちろん英語という言葉だけの問題ではなく極めて政治的な問題である。言語は支配の最も強力な道具のひとつであることは間違いなく、であるからこそ、言語をめぐる紛争は世界で絶えることなく沸き起こってきた。筆者は若いころ国連に勤務し、欧米諸国による世界の植民地化の遺産が依然として深々と根を張っていることを痛感したが、その遺産の中心はもちろん言語である。「英語帝国主義」とは何か？ひとつだけネット検索から引用しておこう。「英語とその他の言語との間にある構造的・文化的な不平等の秩序と連続的再構築によって擁護され、そしてそれが保たれた支配」

Phillipson, Robert (1992). *Linguistic Imperialism*. Oxford University Press という定義である。

この構造はもちろん強固である。21世紀になって英語の汎用性はさらに進んでいるようだし、そうした世界では英語による間接的なあるいはソフトな支配の構造は日々深化しているといえそうだ。しかしどうやら21世紀の前半、当面、世界ではリンガ・フランカとしての英語の地位は揺らぐことなく、ますます拡がりを見せそうである。もはやここではあからさまなネイティブ・スピーカーによる文化帝国主義ではなく、脱色された「道具としての英語」がかつて構想されたエスペラントの地位を獲得しそうである。いやすでに獲得しているのではないか。筆者自身も自らの中に二面性を抱える。ひとつはこの21世紀に生き続ける文化帝国主義的構造を明らかにすること、さらにこの構造にとって代わる、より非支配的な交流・交換の流儀のためのグランドセオリーを開拓することだ。つまりウオーラステインのいう「近代世界システム」にとってかわる次の世界のためのセオリーを開拓することだ。これは政治学、社会科学の方法論にかかわることだ。もうひとつの面は、学生に向かいあっている時や自分自身が国際会議などで発言するときにやっているように、割り切って、現在ただいまの、HERE & NOWの世界にとりあえず躊躇なく乗っかることだ。ここではリンガ・フランカとしての英語の世界に乗っかることだ。脱色した英語の世界に乗っかることだ。つまり英語をネイティブ・スピーカーから解放することだ。

ウイーンで学生が直面した英語という壁。それを何とか乗り切ってほしく日々アドバイスを送りながら、もう一方ではじつは学生ともども「英語という難問」について改めて色々考えることになった。世界の中での日本についても、英語という難問を通じて、学生とともに改めて考えることになった。SAウイーン・プログラムの報告書という性格と、それをベースにした感想あるいは考察という二兎を追うことになったが、本稿では忘備録的に様々書き留め、今後の考察の材料とさせてもらった。

付録：2017年度SAウイーン帯同 筆者日誌抜粋

第1日 Tさんと時間通りに集合。成田出発便約一時間の遅れを告げられる。

WiFi などの受け取り場所について、関係者の間で連絡の混乱があったようでJTB成田のカウンターでは承知していなかった。当方から「必ず手配されているはず」と念を押すことでようやく動き、受け取り場所も二転三転した。この間、成田JTB担当者が誠実に迅速に対応したため事なきを得た。教訓：受け渡しが必ず行われるようJTBと大学の間で念には念を入れること。

ヘルシンキ空港は乗り換えがやや複雑。今回のように時間がない場合は引率者はやや焦る可能性あり。ただしヨーロッパ各地への便は多数あるので必ず時間は別にして当日中に目的地に着くことができると思われる。パニックになる必要はない。教訓；ヘルシンキではJTBのアテンドなかったが、可能ならその点、事前に明確にしておくべきか首尾よくヘルシンキでの乗り換え便に間に合ったので、予定の時間でウイーン到着。空港で迎えあり。直接学生寮でチェックイン。JTBアテンドの好意で事前にカギを受け取っておいてもらったので（その際、前金を肩代わりしてJTBアテンドに支払ってもらっていたので）TさんからJTBアテンダントに現金で返金。ここでアテンダントの仕事は終わりだが、好意により、Iのホテル（寮から徒歩3分）チェックイン後、アテンダントとともに大学に行き登録場所を確認。その後アテンダントをTさんとともに夕食に招待。様々な当地での生活情報を教示いただいた。IIにとっても、しばらくぶりのウイーンであったので大いに助かる。

第2日 Tさんは午前中に大学で登録。同時にクラス分けのためのテスト（インタビューを含む）を受ける。担当者との相談の結果、初級クラスに登録。Tさんと一緒に近くのスーパーで買い出し。学生寮での貴重品の管理やや不安ということで、Iのホテル・セーフティーボックスに部分的に預かることにする。

第3日 授業初日。説明の後早速クラス開始。IはTさんと遅い昼食をとりながら様子を確認。Tさんからは全体として首尾よくスタートできたことの報告。

第4日 授業後、Tさんは同クラスのみんな（約15名）とともに大学内の室外カフェで昼食会。その後Iのホテルに立ち寄る。夕食をとりながらクラスの様子を聞く。

Tさんからはとにかく英語の重要性を訴えられる。クラスのみんなどの昼食会でも共通言語が完全に英語で、かつ授業の説明もほぼすべて英語で行われるので自分としてはドイツ語のことより英語で苦戦しているとのこと。「日本でも初級・中級の外国語は日本語で説明しながら進められることを考えれば当たり前かもしれない」とのTさんの言。少なくともこのクラスではドイツ語でドイツ語を学ぶところまでには至っていないのでTさんの「英語で苦戦」「多少英語に自信ある神大生には最高の環境」という意味はわかる。なおクラスには日本人1人であるので、この点ではやはり相当つらい可能性あり。しかし逆に挑戦しがいのあるプログラムであろう。*Tさんのクラスの構成：日本人1、ロシア人1、スペイン人2、アメリカ人1、中国人1、コロンビア人1、イギリス人1、フランス人1、チェコ人1、アイスランド人1、イラン人2、サウジアラビア人2

第6日 近くのレストランで夕食予定だったが、Tさんが予定の時間から1時間を過ぎて来なかったのでIは相当焦る。数日間にわたり自分の英語力のなさや、完全に英語の環境（クラスおよび寮）の中での孤独感などで相当参っていることもあり「万が一」ということもあり、あらゆる手段を使って連絡とるが、なかなかうまくいかず（電源やらスマホの調子やら）、とにかく寮まで出向く。寮の入り口でTさんと会えた。「ほんとにすいません、すいません」と本人は大恐縮。当方からのメールメッセージ等もみずに日本から留学中の学生A君と寮で夢中に話し込んでいたとのこと。同じ悩み（やはり英語のことが大きい）を抱えている学生に出会って、とにかく話を聞いてもらえて時間を忘れたとのこと。Iとしては「それは本当によかった、約束の時間に遅れたこ

とは全く気にしなくていい」と対応。これはIの本音でもある。Iの心配など吹っ飛ぶくらいに、同じ境遇の仲間に出会えて話ができただことは本当によかったと思った。しかもその夜、A君とA君の友達（非日本人）と3人で野外コンサートに行くということになったようで、Iとしては大きく胸をなでおろした。その後Tさんと夕食。Tさんはコンサートに行く。なお「話し込んだ日本人学生A君も一緒にザルツブルクに来てもいいから」といったが、日本人学生A君は半年滞在予定でもあり、費用もかさむのでパスとのこと。

第7日 朝7時、タクシーでウイーン西駅。ホテルでネット購入しておいたチケット（往復約6500円）で片道2時間半、快適な電車。車中でザルツブルクのサッカーチーム Red Bull のホームゲームが行われることを発見。レッドブル（飲料水メーカーレッドブルの創業者がザルツブルグ出身。サッカーチーム経営にも参画か?）には日本代表の最年少フォワード、南野（みなみの）がエースストライカーで所属。Tさんの希望もあり、Iも異存なく、急遽このゲーム（ザルツブルグVSウイーン）を観戦することに決定。サッカーチケット（一人約4000円）をホテルカウンターで首尾よく予約。タクシーでサッカー場（約2000円）到着。文字どおり最前列で観戦。サッカー専用グランドのためプレーヤとの距離も15メートルあるかないか。試合は5-1でホーム、レッドブルの完勝。エース南野は温存される。近くでプレーを見たかったTさんにとっても残念でどうしようがなく、気持ちが収まらない。Iも同様。Tさんが英語問題で相当落ち込んでいて、何とか元気にしなければとIも考えていたので、関係者に聞きまくり、交渉し、試合後選手が出てくる出口で地元サポーター約10人とともに待つことに成功。30分後、南野をはじめとするプレーヤと直接会い、写真を取り、サインをもらうことに成功。スポーツウーマンでJ1のサッカーの試合観戦も何回も行っているTさんにとっては特効薬と考えた次第。

なお選手の出入り口には、もう一組外国人もいる。旅行中に応援に来たという韓国人（30代か）の二人組。ひとは英語も日本語もほぼ

完璧に話す。超フレンドリー。聞けば京大でMOOK（授業・講演の国内外への配信事業・・・米国をはじめとする世界の有力大学では凄い勢いでそのコンテンツの充実もここ数年で進んでいる）コンテンツ、配信プロジェクトのメンバーだという。専攻は『高等教育』。京大の最先端事業を進めるのが、英語・日本語をほぼ完璧に操る韓国からの若者であることに、Iとしては日本の大学の国際化について考えることひとしお。

第9日 Tさんの寮の仲間がパーティーに誘ってくれたのでそこに行くという連絡あり。大いに安心。同時にTさんの精神状態が変わることを期待。しかし直前でやっぱり英語がさっぱりなので、不参加とのこと。30分以上説得し、とにかくパーティーに出ることになる。Iとしてはここがひとつの展開の分岐点になると考え、かなり強引に説得。結果を期待する。

第10日 パーティー出席は大正解だった模様。行ってみたらおしゃべりのパーティーではなく、ダンスのパーティーだったとのこと。夜更けまで踊りすっかり気分が変わったたことのこと。行きも帰りも寮の学生4人でタクシーをシェアしたとのこと。相変わらず英語がちんぷんかんぷんで、その部分は苦しいが、とにかく昨日のパーティーで英語を意識しないコミュニケーションが成立。Tさんのウイーン滞在の大転換が始まること間違いなし。

その後の日誌は省略（ただし最終日8月25日の日誌は本文中に挿入）